



自宅で倒れた患者さん、「顔を見たら元気が湧いてきました」

東山区にあるゆう薬局の男性薬剤師Fさんはもとと「おばあちゃん子」。直接お宅に訪問し、地域の高齢者を積極的にサポートするゆう薬局の姿勢に共感。「人の役に立ちたい」と7年前に入社しました。

この冬、こんな事件がありました。80代でひとり暮らしの森さん（仮）は食欲旺盛ながらも胃腸が弱く、医師の要請でFさんが週1回、様子を見に自宅を訪れています。その日、森さんがいつもより食欲がないの

が気になり、昼の訪問後にFさんに電話を入れましたが応答がありません。「いつもならベッド脇の携帯にすぐ出るのに」、不審に思ったFさんは別のスタッフに訪問を依頼すると、森さんは玄関でうずくまっていたそう。特に異常がないと確認して、スタッフは帰社しました。

Fさんは気になってその1時間後に再び森さんに電話をしました。が、今度も応答がありません。Fさんはケアマネージャーと駆けつけました。すると森さんは床に倒れ、身体が冷え切っているではありませんか！

幸い意識はありました。水分を摂り、Fさんと話すうちに、森さんは笑顔で夕飯も食せるまで回復しました。念のため、森さんがベッドに入るまでFさんは見守りました。

翌日 すっかり元気になった森さんはこ
う教えてくれました。「トイレに行こうとし
て倒れて、ずっと不安でした。Fさんたちが
来てくれて、本当に嬉しかった。Fさんの顔
を見たら、ぐっと元気が湧いてきたんです」。

Fさんは、あの日を振り返ります。

「脱水症状を起こしやすい冬、筋肉量が低下していた森さんは、動けなかったのです。」

患者さんの様子に注意するのも、薬剤師の役目です。会うだけで元気になる森さんのような方もいる。頼りにされて、嬉しいです。」

ゆう薬局では、普段から患者さんと会話を重ね、信頼を築いています。認知症の高齢者は警戒心が強くなりがちですが「近くの薬局の人」には親しみがあると、在宅医療に切り替えても混乱が少ないそうです。医療、介護、福祉部門と積極的に連携し、地域の人々を支えるのも、薬剤師の仕事なのです。

ゆう薬局
ハンケイ
500m
物語

vol.
05

なんでも相談できる「ゆう薬局」には、お客さまとの物語があります。



豆知識

熱中症と 薬局・薬剤師

外出時に熱中症の危険を感じた際は、薬局で少し休んで頂くことも有効です。脱水対策のグッズも販売しておりますので、気軽にお立ち寄り下さい。

ゆう薬局グループ本部・
宇野薬局

☎075-771-1690(本部)
📍京都市左京区浄土寺下
馬場町106

もよりバス停は「錦林車庫前」

KBSラジオ
“サウンド版ハンケイ500m”
 の番組内にて、ゆう薬局の
 ラジオドラマを放送中！

每週土曜17時～18時！